

歡呼の聲に送られて

私の入營記

昭和十四年十二月一日

私は十四年徵集の現役兵として、佐倉歩兵第五十七聯隊に、級友三橋權治君は甲府歩兵第四十九聯隊に入營と決まると。

又は真新し、私服の軍服に名前入りの袴をまじり、八幡宮拜殿の前にもくもくと頭を垂れ武運長久を祈った。

既に喜境内には青年団、女子青年団、愛国婦人会、隣組の方々を始め村人が大勢のつらかりをおられた。区長、青年支部長も御祝いの言葉を頂き、私と三橋君は夫々

「元氣を倍々養ひます、苗字中家のことはよろしくお願ひします」と大まかな声で謝礼の辞を交した。「前へ進め」支部長の命令で進が始まりました。

勝るもろもろと勇ましく進むる故國を出たからや、手柄方をすたおのりよふか、青年団の衆隊も先頭に、祝入營三橋權治君、祝入營青木基治君の二本の旗も

朝風にひたひたせながら八幡宮境内にお登った。家門には顔をみみのおおさんおばさんや、おつ子おつ子決たままで、ご苦勞様です、元氣でな、しつやそい、なとと手を

振ると手をかけにくれました。我が家の前を通つたとき、手を振返すと、路角に立ちどまりと見わたつた母の姿がごとと胸にしみえた。

松を踏切りから千の川邊防濠に、鳥井産松を海り、東海道(二回)に出ると前にはうらに一諸に入營する級友連の旗が旗に向つて列を連らぬつた。

若將隊前敵島神社境内で一同整列、町長と兵隊担者の方々が祝辞を受け、記念写真真を撮り、お高きに萬歳を三晶した。

列車がくろまをの同限点に入員だけホームに入り、夫々陣を作ら、日の丸の旗を振りながら最後を送るられた。

「天に代りて不義を打ち、忠勇無敵の我が兵は、歡呼の聲に送られて!!」歌はホールの天井にこぼれ、割れんばかりの行儀である。

酒張れよ、元氣を養われ、からむに氣をつけて、奮氣にだけけるぞー!列車は茅葺きもあまた来へ、とすべり出た。

横浜、川崎、品川を過ぎる頃になり、送るべきを友人連は次々に別れ

れを召掛けあつていつた。対談は家族一人に限定をもちかゝりた。

杉と又と三人座席につくはうと一息つらうをいふ。ついで多きあそびをいふに

だつた級友たちしつゝのあそびのうらに静かになると、とり顔もかきな淋しげに

見たり。列車は同じく佐倉駅に到着。そこの後を目的地向つた。

佐倉歩兵第五十七聯隊 筆太く書かれた門札が力強く感づかぬ。

正門前には兵士が銃を立て、敵然と立哨し、右側の衛兵所には下士官

以下五・六名の兵隊が控えていた。

教育係上等兵の指示を受け、支給された官服に着替へ、私服は下着を

全部川豆敷に納め、官庭で待つ、又の許えを待た。

襟章は皇一門陸軍歩兵二等兵 會々今日が帝國軍人とて人

前にならぬ訓練されるが、兵營生活とはなごらう、<sup>以前から</sup>除隊兵に聞くと

は言がまだほろけの事は判りない、二時から始まる未知の生活に不女は

次々と重なるくる。

そのとき、朝々静かに集合する。みんな我々の先輩軍兵で

ある。そのきびぐんと動作、軍服がびくびくと着崩された云はば、<sup>てま</sup>掃にすう

た先影も目を、私に胸を張つた。負けるか、相張るぞ、よし、

軍靴のしもと固くをすんで身も心も強く生きなげと決意して又と別れの

擧手りの敬礼をし、指定された集合地へとびやうた。

聯隊長に敬礼頭アリ右 官庭に整列した各隊兵士の頭が

一斉に動く。我々初年兵の入隊式が始まった。

諸兵等は栄えある現役兵として入營これほど名譽あることはない。

本日も教官を始め先輩軍の指導を受け立派な帝國軍人とすう

目的達成に邁進せんことを期待する。終り。

聯隊長の威厳ある祝辞と贈り、一同緊張した顔に紅潮させた。

入隊式終了後初年兵一同整列隊の編成が傳達された。私は

機関銃中隊要員として内務班に配属され始りたるの兵營

宿舎で一夜を明かした。